

ハマクサギタマゴタケ

山下ひかる

きのこには未だ学名の与えられていない種類が数多く存在し、実際に野外を歩いてみても、学名までたどり着けるきのこの方が少ないというのが実情です。たとえどこでも見られる普通種かつ大型で目立つきのこであったとしても、学名のついていない未記載種であるケースはたくさんあります。

その好例が、まだ仮称のきのこハマクサギタマゴタケ *Amanita* sp. です。本種はテングタケ属に属し、かさか 20cm 以上にも達する巨大なきのこで、数十本の大群生をつくることもあります。主に九州から関西などの西日本に広く分布し、公園の照葉樹下などでもふつうに見られるようです。静岡県内では浜松市で梅雨時期と秋に発生を確認しており、東部でも発生情報があります。

ハマクサギという植物のような匂いがすることからこの名前で呼ばれていますが、実際にはあまり匂いがしない

場合もあるそうです。また他にもアイボリー色のかさや、二重になる大型のツバとツボなど、あまり他の種では見られないめずらしい特徴を持っています。

これだけ特徴的かつ普通に見られるきのこでありながら、まだ正式な記載はされていません。きちんと検討できる文献が存在しないまま便宜上の仮称として知られているのが現状で、ハマクサギタマゴタケとして呼ばれているきのこの定義そのものがあやふやなのです。

また、その分類学的な位置づけについてもまだ十分に研究が進んでいません。最も近縁であると考えられているのは 1992 年にネパールから記載された *A. chepangiana* Tulloss & Bhandary です。本種は 2016 年に八重山諸島からナンヨウシロタマゴタケという和名で新産報告がなされ、その後本州暖温帯での分布も報告されており、形態的に酷似していますが、両者の明確な関係は未だ明らかにされていません。さらに 2018 年に中国から記載された *A. alboubelliformis* Y.Y. Cui, Q. Cai & Zhu L. Yang についても形態的に酷似しており、精査が必要な状況となっています。

写真は9月に浜松市の都市公園で撮影したもので、巨大で白いきのこが数十本の大群生をなす様子はかなりの迫力で驚かされました。成長する様子を観察するため、3日間毎朝通いました。この浜松産の標本について、今後検討をしてみたいと思います。

